

会 議 記 録

会議名称	令和2年度第5回社会教育委員の会議
日 時	令和3年3月29日(月)午後1時37分～午後3時45分
場 所	中棟4階 第2委員会室
出席者	委員 山口、小澤、朝枝、南、檜枝、赤池、天野、内山、笹井 区側 生涯学習担当部長、生涯学習推進課長、 社会教育推進担当係長(社会教育主事)、 教育連携担当係長(社会教育センター社会教育主事)、管理係主査
配付資料	<p><配付資料></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 令和2年度第4回社会教育委員の会議 会議記録(案) 2 第16期杉並区社会教育委員の会議「まとめ」作成に向けて(骨子案2) <p><参考資料></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 すぎなみ教育報No.239 2 第6回すぎなみサイエンスフェスタ 3 ノーベル賞を受賞した日本科学者展 4 「杉並サイエンスコミュニケーション」2号 5 すぎなみ PATTO! Vol.1 6 すぎなみ PATTO! Vol.2 7 新・荻窪はっけん伝 第1章 8 炉辺閑話No.64 9 杉小P協だより 10 青少年委員だより第76号 11 令和2年度青少年委員実践記録 12 なみすく 2021年春号 13 とうきょうの地域教育No.142 14 社協連会報No.88
会議次第	<p>I 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 会議録の確認について 2 事業の進捗状況について <p>II 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 検討課題について <ol style="list-style-type: none"> (1)今期のまとめについて (2)次回に向けて 2 その他

(意見要旨)

- 議長 オンラインだが率直にいろいろな意見を頂ければ思う。
- 生涯学習担当部長 今年度、今日の検討課題が「今期のまとめと次回に向けて」となっているが、今後の目指すべきことや区に関わりなどについても言及できればと考えている。
- I 報告事項 2 事業の進捗状況について
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） 郵送したすぎなみ教育報No.239号が最終号となり、今後は、広報すぎなみの中で教育の特集にして区民に伝えていくということになる。
- 教育連携担当係長 配布資料ある「なみすく」の中に、PTAのコロナ禍での活動のほか、今取り組んでいる教育振興基本計画審議会のことを紹介しているページがある。非常に分かりやすく、これからの杉並の教育についてどういう観点で話し合っているのかというのが紹介されているので、一読していただければと思う。
- 生涯学習推進課長 サイエンス系のものは体験型が難しく展示系の事業になっている。サイエンスフェスタも今年はオンラインで実施する。博物館は、イベントなどができないものの、展示はディスタンスを取りやすいので実施をしている。今回、「杉並サイエンスコミュニケーション」という情報紙を作成し小学校3年生以上全員に配っているが、ぜひ、意見をうかがいたい。心配なのは、どういうターゲット層にどういうふうに伝えるかということで、特に小学生には難し過ぎるのではないかだが。
- 委員 小学校3年生には難しいと思うが、全員に分かりやすい小学校3年生向きものを配るよりはよい。
- 委員 中学校も、理科の授業は実習的なものが行えなかったので、視覚的に捉える部分として大きい。
- 委員 今回A5サイズで開けて、裏のそのフィールドに出かけようという体裁はとてもよい。ただ文字が小さいので、裏面が大きければよいと思う。
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） 「新・荻窪はっけん伝」を配布しているが、関係している委員からはいかがか。
- 委員 社会教育センターの大人塾の地域コース、荻窪コースに、サポーターとして参加した。各自が荻窪のエピソードをA4一枚でまとめ、それをまとめて立派なものできた。また、この受講生から地域区民センター協議会委員に参加してくれたりして、まさしく地域活動をする人材の供給源として実効性を持っていると思った。実際の講座は4回しかできなかったが、ここまで仕上げた受講生の力はすごいと思った。
- II 協議事項 1-(1)今期のまとめについて
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事）
※「学びのまち杉並」とこれからの社会教育について－第16期杉並区社会教育委員の会議「まとめ」－（骨子案2）」について説明。
- 議長 質問はいかがか？ちなみに「事後対応から事前対応への転換」というのは、どういうことか？
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） コロナ禍で私たちの経験が生きて、もっと前向きに考えていくことが可能になったのではないかというような意味合いである。

- 議長 在宅勤務等に適応可能な活動というのはどういう活動か、加えて「地域を創りあげる立場への転換」についても教えてほしい。
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） 自宅にいる時間が増えた分、地元や近所のリアルな活動に関心を持てるのであれば、そこにかかわろうというようなことがなければつながる可能性がなくなり家にいるだけで終始してしまう。それとは違う立場になってほしいということ。
- 委員 「協働の担い手を育て推進していく専管組織を区長部局に設置」は具体的には何という部局なのか。
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） すぎなみ地域大学担当課が協働推進課と課名を変え、現在に至っていて、今は区民生活部地域課が所管となっている。
- 委員 アウトリーチとは？
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） 必要なところに必要なことを行うために出ていって、その場で実践するというスタイルのことである。
- 委員 4(2)「「コロナ禍」の経験に学ぶ」というタイトルだが、まだコロナからこんなこと学んだと言えるレベルには到達していないのではないかと思う。論点整理としてメリットとデメリットの確認を行ったというぐらいにとどめるべきではないか。
- 委員 いつどうなるか分からないものを前提とするより、社会教育がやってきたプロセスをどう大事にしていくかを再確認することが一つの目標になり得るのではないか。
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） まとめるにあたり、どう進めるかを明確にするため方向性をきっちり示せる項目にしたうえでまとめてみようという作成意図であった。その意味において、正式なまとめで用語の使い方についてはご指摘を踏まえて修正していきたい。
- 委員 施設整備をしていく上で、実際の場合というのがとても大事なので、それを大事にしつつオンラインを利用していくことが必要ではないか。
- 委員 本当にリアルでないと、オンラインでは地域活動に結びつかないと実感している。「コミュニティふらっと」は社会教育活動の拠点としては有効なものになるように思うのだが、所管課の職員の話聞いてみても、必ずしもそういう視点はない。協働の担い手を育てていくような働きを、この委員会の提言の中にも入れてほしい。
- 議長 10ページの「「コロナ禍」の経験に学ぶ」の一番初めの部分で、社会教育は本質的にこういうものだというのをきっちり触れておいたほうがよい。その上で、こういった課題があると提起したほうがよい。社会教育行政というのは、非常に広い領域を指しているのだから、協働の担い手についての記述を工夫してほしい。
- 委員 杉並区のホームページを見ると、地域の整備を「コミュニティふらっと」、地域コミュニティ施設を活用してやっていくという方針が出ているので、こういう文言を取り入れるようなこともあろうかと思う。
- 議長 どうしても職員はサービスを提供するという観点が強いので、社会教育委員会議のほうで、きちっと書いておくというのは大事だと思う。
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事）
※資料5、6について説明。

- 議長 社会教育は、本当はリアルなコミュニケーションの場でなくてはならないが、いじめの相談は電話やLINEのほうが相談しやすく、メディアを通したほうがハードルが下がるという面もあり、うまく使えないかと思っている。
- 委員 記載では、オンラインに非常に期待されたものになっていて、リアルに対しての言及が非常に少ない。せっかく「コミュニティふらっと」というインフラが整備されようとしているのだから、大いに社会教育で活用しようという文言を入れてほしい。
- 委員 課題解決が目的ではなく、共に考えて行動していく中で課題解決を目指すのが社会教育。土壌に社会教育を置いて、何か考えられるような提案ができるとよい。
- 議長 最近、課題の広がり方が地球規模になって、企業同士とか、NPOとNPOとか、誰かと一緒に何かをするということがとても大事になる。コロナの問題で、それがはっきりした。協働という言葉はキーワードだと思うし、この5のところにぜひ入れていきたい。
- 委員 社会教育としての目的、一緒に問題を解決していくとはどういうことなのかきちんと明確にあって、その中の選択肢の一つとして、リアルがいい場合もあるし、オンラインのほうがよい場合もあるし、目的と手段を間違えずに、社会教育というものを考えていけると、どちらのいいところ取りもできてよいと思った。
- 委員 全ての人々が、より豊かに、よりよく生きる、そのために学ぶことというのが社会教育の一番目指すところであり、それがSDGsであったり、人権を守るということであったりする。PTAでは、先生方が参加できる仕組みづくりや、全ての家庭がオンラインで配備できるわけではないので書面も大事にしよう、対面とオンラインのハイブリッド化をしたり、施設がなくなったことのリスクを踏まえた上での議論をしたり、場所をできる範囲で確保するということは、定義してもよいのではないか。多様な人たちと話す中で、上下関係、主従関係があるのはよくないし、特にジェンダーバイアスの話では対話とか協働を阻む概念になり得る。アクターになるためには人が対等な関係であるというような文言が入っているとよいと思った。
- 委員 社会教育センターのセンター機能として、場所、職員がいて、団体や人材を育てていかななくてはいけないと思った。教育ビジョンなどに反映されるものであれば、きちんと明記しておくほうがよいと思う。
- 委員 プロティアンキャリアという考え方があり、先が読めない環境の中で自己をつくっていくためには、自分を変えていくことが前提になるということである。構築できたときに状態が変わっていたら何の意味もなくなってしまうので、変幻自在性のある組織づくりが我々の課題の中になんといけないのではないかなと思う。
- 委員 時流に乗って即変化するという考え方には、経験してきた思うところがあり非常に危機感を抱いてしまう。リアルよりオンラインのほうに偏っていて、もっとリアルを重視しなければいけないと思う。
- 委員 リアルが入ってくればよいのか、それともリアルがなければ全面的に駄目だという意味か。
- 委員 危機感を感じるのは、スピード感を持って変わると言った部分に

対してで、バランスをもってリアルが入れば良く、5の記載に反対しているわけではない。

○議長 考え方に差異ができるということは、学びの材料が増えるということで、対等な関係性というのは建設的な議論になり得る。議論していくことは、対等な関係性がプロダクティブになって、パートナーシップの関係性をつくっていく。役割がころころ変わるというのもすごくプロダクティブになると思うが、それを無限定に広げるとまずい方向につながるという指摘もそうだと思って聞いていた。いい意味での流動的なものをつくっていくことは大事だと思った。

○委員 学校教育でも社会教育でも、学ぼうとする人がどういう方法がいいのかを社会の情勢に合わせて選び取って行って、実現させていくというところが大事だと思っている。

○副議長 遅刻が多かった学生が、オンラインになって、ほとんど授業に出席できるようになった。これまで身体的に元気な人によってつくられていた学校の在り方が変わってくると思った。ルールの変化が学校でもあるのではないか。

○委員 今から30年ぐらい前に、部活動を社会体育に移行できないかという動きがあったがうまくいかなかった。数年前にも国のほうから部活指導員を各自治体でもって学校に置いてくれという話が出てきた。コロナの状況になったときに、オンラインでできない部分がたくさんあり、思いが先行するのはよいが実態と現実が乖離しているようなところで話がされるのは厳しい。これからはすべてオンラインでいかなければいけないという前提条件に立ってしまうというのは、少し不安だと思った。リアルの関係にどう近づけていくかということが、我々が考えていく岐路に立っているのではないか。

1-(2)次回に向けて

○社会教育推進担当係長（社会教育主事） 5月の下旬にこのメンバーで集まる最終回を予定したい。社会教育関係団体の4団体に補助金を出すためにあらかじめ意見を聞きたい。この後、教育ビジョンの検討の審議会があるが、皆様方に意見を頂くような機会が必要な時は、資料のやり取りになると思う。

○議長 今日頂いた意見を踏まえて修正し、メールで送らせていただき、意見を頂きたい。

○生涯学習推進課長 こういう白熱した議論ができるのも、オンライン会議の一つの成果なのかもしれない。教育長が、コロナが収まったら、令和2年度を3年度に反映させることが必要だというような話をしたが、収まってまた元に戻ればいいのではなくて、よいところは維持しつつ、今までよりもよい形の社会教育、生涯学習ができればというふうに考えている。

○議長 引き続き、皆さんと議論していければと思っている。ご協力ありがとうございました。